

# 日本記者クラブ会報

創立40周年パーティー

## 両陛下再度のお出まし

### 鳩山首相がお祝いの挨拶を



挨拶はジェファースンの「新聞と政府」についての箴言から始まった

創立40周年記念パーティーを、11月4日午後5時30分から、10階ホールとアラスカを使って開催した。招待者、会員約500人が出席した。今回も両陛下が公務でお忙しいなかお出ましになられた。

11月13日だった。すぐその日の午後、宮内庁の担当者を訪ね概要を打ち合わせた。15、16日の静岡での新聞大会をはさみ、翌週の月曜に総務委員会を開いた。前回同様、この委員会が実行委員会となって準備に当たることになった。この実行委員会では、

両陛下と懇談する予定者も決めた。ここから事務局は大忙しになった。新政権の閣僚、オランダ首相、ニュージールランド首相などの会見をこなしながら、全会員に通知を出し直すところからやり直した。懇談予定者、

第477号  
2009年  
(平成21年)  
11月10日発行

〒100-0001  
東京都千代田区内幸町二ノ二  
日本プレスセンタービル  
© 社団法人 日本記者クラブ  
<http://www.jpnc.or.jp>

関係者などへの連絡、プレスセンター、アラスカ、警察、消防などとの打ち合わせにきりきり舞いした。

両陛下がお出ましになると案内し直すや、会員からの申し込みがそれまでの3倍にふくれあがった。欠席予定だった招待者からも、日程を変え出席するという連絡がきたりした。

30周年の時は、最初の30分で、両陛下は9階の宴会場でクラブの歴代理事長、副理事長、委員長のほか、新聞協会と民放連の役員の方々と懇談した。小休の後、パーティー会場の10階ホールで約40分、会員代表と懇談された。

今回は時間も40分と限られていたため、懇談者をクラブ関係に絞らざるを得なかった。内訳は理事長経験者4人、クラブ賞受賞者5人、企画委員3人、元委員2人だった。斎藤理事長と朝比奈実行委員長が両陛下をご案内し、宇治、今井両副理事長はじめ役員、委員が分担して招待者の接遇に当たった。国会会期中だったが、7時過ぎには、鳩山首相も駆けつけ、挨拶してくれた。

1969年10月31日、尾崎記念会館での創立総会で、11月1日付での日本記者クラブの設立が決議された。誕生後は新聞、放送界の隆盛と、わが国経済の発展と国際的地位向上という順風にめぐまれた。その中でクラブも高度成長を果たした。

不惑を迎えたこれからは、風だよりでなく、乗組員全員が心を合わせて何本もの太いオーラをこがなければならぬ。これまでの輝かしい実績と各界からの祝意と国民の信頼を糧にして。

政府から完全に独立した、アジアで唯一のプレスによるプレスのため拠点としての責任と自覚と覚悟を新たにしながら航行が始まった。

### 『とっておきの話』の刊行

招待者には、40周年記念事業として出版した『とっておきの話』(六)をお持ち帰りいただいた。全会員にも配布した。

刊行の辞にあるように、現場に居合わせた記者だけが語れる「事実」の証言集でもあり、どれも人間臭く、時代の息づかいが聞こえてくる。今回も国会図書館、都道府県や主な大学など約90の図書館へ寄贈した。

(専務理事 岩崎玄道)



「40歳」を祝う (11・4)

齋藤史郎理事長あいさつ

天皇皇后両陛下、そして各界を代表される皆さま方、本日は大変お忙しい中、日本記者クラブの40歳の誕生日パーティーにご参加いただきまして、まことにありがとうございます。

自由な言論の砦

40歳と言えば、論語の言うところの「不惑」の歳でございます。世の中は激しく揺れ動き、世に情報はあふれかえっておりますが、日本記者クラブは、こうした中でも自由な言論報道の砦として、また正確で責任ある情報の発信基地として、迷うことなく歩み続けていきたいと考えております。引き続きよろしくご指導、

ご鞭撻お願いいたします。私ども記者は、このような場での、人をもてなすことが、あまり得意でない集団でございます。本日は行き届かないところがあるかもしれませんが、ぜひ親睦を深めていただければ幸いです。

今年も、皆さまもご承知の通り天皇陛下即位20年、両陛下のご成婚50年の年にもあたります。日本記者クラブの創立40周年とあわせてお祝いしたいと思います。ご参会の皆さま方のご健勝とともに祈念して乾杯したいと思います。乾杯！  
大きな声でご唱和ください。



予定時刻にお着きの両陛下を迎える

- 17:27 両陛下1階玄関着、10階ホールへ
- 17:30 理事長あいさつ、乾杯の後、両陛下は会員代表と懇談
- 17:46 天皇陛下は船橋企画委員長らの会員やルース駐日米大使らと自由懇談へ
- 17:52 皇后さまは住田会報委員長や渡辺施設運営委員長らの会員、緒方貞子さん夫妻らと自由懇談へ
- 18:14 両陛下退席
- 19:13 鳩山首相が予算委員会の後、官邸でのぶら下がり取材を終えて到着
- 19:18 首相あいさつ後の後、懇談
- 19:32 首相退席 入れ替わりに平野官房長官到着
- 19:34 官房長官あいさつ
- 19:47 閉会



斎藤理事長の先導で 大きな拍手のなか会場へ

## なごやかにご歓談



皇太子時代のエリザベス女王戴冠式ご出席や50年前のご結婚の儀を取材した村尾会員は思い出話を



会員代表の田崎企画委員と

●30周年に続いてお出でいただいたことに、私の方からお礼と、即位20年のお祝いを申しあげた。陛下は、上野の東京国立博物館で開いている皇室の名宝展について伊藤若冲、狩野永徳にご関心がおありのようで、お出ましただけそうだ。「そうです。大変な人気です」と申しあげると喜んでおられた。その後の会員の皆さんからあいさつを受ける姿に、メディアを通して国民と対話しようという姿勢を強く感じた。目立ったトラブルもなく、ホツとしてお見送りした。

第12代理事長（日本経済新聞）

杉田亮毅

●40周年記念パーティーに集まった先輩のジャーナリストの諸兄は、いままもお元氣な姿をお見せになり、40年間にわたって、このクラブに出入りしたジャーナリスト集団の尽きることはないエネルギーを全身で感じとった。

天皇、皇后両陛下のご出席もたまたわった。私を含めて、こんなにも多くのジャーナリストたちが、両陛下と親しくご懇談させていだいたことは、これまでにあっただろうか。これもクラブが成長した証しかもしれない。

前理事長（読売新聞） 滝鼻卓雄

●10年前と同じ会場でお会いした両陛下は少し小さくなられたような感じでしたが、皇后様のお優しい声は昔のまま。「今朝は3時半に起きて『みのもんたの朝ズバー』に出演、仮眠を1時間、また仕事をしてここにおります」と申しあげたら、目を丸くなさって私の健康を気遣ってくださいました。

「ご成婚の時には日の丸の旗を振らせていただきました」と申しあげたら、にっこり！ 丁寧なご対応を拝見するにつけ、いつまでもお元氣でと思うのみです。

TBS 川戸恵子

●お氣遣いの方——お話しした直後の皇后陛下の印象である。

皇太子殿下と同じオックスフォードにいた経験を語ると、すかさず当時の私の状況を質問なさる。孫の話になると、何人いてどうしているのか、とお尋ねになる。いつも相手の立場に思いをいたす。その優しさが人の心を打つ。

ご心労を乗り越えた、落ち着きと輝きが顔に表れていたのは、人の心に丁寧な接してきた証左ではあるまいか。

元毎日新聞 黒岩 徹

●事務局から求められた「1〜2分お話しし、1人3分程度」という時間は案内長いな、持つかなと内心、不安だった。しかし、杞憂だった。皇后陛下は私のつたない話に時々、核心を突く言葉を述べられた。あまりの鋭さに、めったに緊張しない私が見るみる上気した顔になるのが分かった。

その後、天皇陛下の近くであいさつを受けられる様子の方がついている。すべての方の話に合わせられている。両陛下のコミュニケーション能力の高さに驚いた。

時事通信 田崎史郎

●4月、ご結婚50年を迎えた明仁天皇と美智子皇后は、能「高砂」の松の落ち葉を掃く老夫婦「刷と姥」のごとく、お二人とも美しい銀髪。

お肌の色やしぐさは若々しかったが、銀髪が共にたどってきた歳月の長さとも重さを感じさせた。一千の目づちを打ち続けて、姿勢を崩すことがなかった。その間、40分。

立派な象徴となった天皇、優れた詩人の皇后。「この浦船に帆をあげて、月諸共に出で汐の……はや住の江に着きにけり」。

元読売新聞 村尾清一

会員代表の懇談者（敬称略）

- 天 皇
- 酒井新二（第4代日本記者クラブ理事長、名誉会員、元共同通信社長）
- 中江利忠（第7代日本記者クラブ理事長、名誉会員、元朝日新聞社長）
- 松本仁一（元朝日新聞編集委員、2007年度日本記者クラブ賞受賞）
- 清水美和（東京新聞論説副主幹、2007年度日本記者クラブ賞受賞）
- 影山日出夫（NHK解説副委員長、企画委員）
- 千野境子（産経新聞特別記者、元企画委員）
- 村尾清一（元読売新聞社会部皇室担当記者、1981年度日本記者クラブ賞受賞）
- 皇后
- 北村正任（第13代日本記者クラブ理事長、毎日新聞会長）
- 滝鼻卓雄（第14代日本記者クラブ理事長、読売新聞東京本社相談役）
- 阿武野勝彦（東海テレビ放送報道スポーツ局専門局長、2009年度日本記者クラブ賞受賞）
- 田崎史郎（時事通信解説委員長、企画委員）
- 川戸恵子（TBSテレビ・シニアコメンテーター兼選挙プロジェクト担当、企画委員）
- 渡辺みどり（元日本テレビ・プロデューサー、元会報委員）
- 黒岩徹（元毎日新聞編集委員、1999年度日本記者クラブ賞受賞）

実行委員会で、会員代表として元理事長、最近のクラブ賞受賞者、元委員など14人を決めた。



「大変遅参をいたしました。まだお残りいただいておりますことに救われた思いを感じながらお祝いの挨拶をいたします」——予算委員会を終えて予定より40分遅れて到着

鳩山首相が挨拶を終えると多くの会員が囲んだ

かつてアメリカの大統領が国家にとって政府とペンとどちらを選ぶかと聞かれ、ペンの方をとるとい話をされたそうであります。まさにそれが民主主義の原点です。

記者の皆さんは、政権に対してはある一定程度の距離感を保たれる方がよろしいかと思えます(笑)。これは野党時代に言っていたことですが、与党になっても、その思いは同じです。そう言えます(笑)。やがてペンが政府に対して批判的な目を持ち続けることが、国家の運営にとっても、民主主義を守るためにも大事なことだと思えます。

新政権です。皆さ方はいろいろな思いをお持ちだと思いますが、一方で期待感をもっておられる多くの国民もおられます。試行錯誤が続きますが、厳しい批判的な目と、しかしそれは民主主義を守るための温かい心だと思いで、「頑張れよ」という応援のメッセージもいただければありがたい。

皆さ方のペンのおかげで民主主義が日本で根付いてきていることは何よりだと思います。しかし本当の意味での民主主義というものはなかなか難しいことではないかとも思えます。その意味で、今後ますます皆さ方が努力をされて、日本そして国際社会で活躍をされますことを、祈念申し上げます。





天皇陛下との懇談を待つ中江元理事長 清水 影山の両会員（前列右から）



両陛下を迎える滝鼻前理事長 黒岩会員 住田会報委員長 江田参院議長（前列左から）



経済談義？ 岡村日商會頭（中央） 齊藤東証社長（その左奥）を囲む 会員



白川日銀総裁もお祝いに



ご夫妻で——緒方四十郎氏は特別賛助会員で 研究会講師にも 貞子夫人はクラブで11回会 見 ご夫妻で計14回も「クラブゲスト」に

写真 産経新聞写真報道局の栗橋隆悦、鈴木健児両記者にクラブ腕章をつけて撮影をお願いしました

△主なゲスト▽鳩山首相、平野官房長官、赤松農水相、中井国家公安委員長、江田参院議長、松野官房副長官、大島自民党幹事長、中川元自民党幹事長、山口公明党代表、御手洗経団連会長、岡村日商會頭、桜井経済同友会代表幹事、白川日本銀行総裁、齊藤東証社長、緒方JICA理事長、古賀連合会長、楊逸芥川賞作家、ルース米、ベールイ・ロシア、マクレーン豪、ケネディ・ニュージールランド、ベンシトリット・イスラエル、アラグチ・イラン、アブデルナーセル・エジプト、ドウ・ヘア・オランダ、ロドリゲス・キューバ、ジャドマニ・パキスタン、ルイスカバーニヤス・メキシコ、グローバル南アフリカ大使など 外交団で27カ国・地域。



左からルイスカバーニャス・メキシコ大使  
アリアガ・メキシコ大使館次席 イシカワ・  
ベネズエラ大使



中川元自民幹事長と昨年、芥川賞を受賞しクラブで会見し  
た楊逸さん（右から2人目） 右端は川村企画委員



閉会間際にかけてきた平野官  
房長官（右）を迎える朝比奈  
実行委員長



アメリカのルース大使も長時間  
懇談の輪に



進行役は井田企画委員（右）が務めた



ジェームソン会員と若宮会員



懐かしい仲間たちと



東京支社編集部長の皆さん 南谷（東奥）  
矢島（信毎） 田口（秋田） 岡山（山陽）  
の各会員（左から）

### 「法の日」の法曹3者会見

#### ▼「順調なスタート」に一安心

10月1日「法の日」の前身は、1928年のこの日に陪審法が施行されたのを記念して設けた、戦前の「司法記念日」だそうだ。

43年4月から今に至るまで「施行停止中」の陪審制度の衣鉢を継ぐ裁判員制度を広報するために、法曹3者の代表がこの日に合わせて共同会見をするようになったのは、「法の日」の来歴にまことにはふさわしい。

3回目の今年は、2カ月前に第1号法廷が開かれた裁判員裁判の滑りだしをどうみるかについてのスピーチで始まった。裁判所、検察庁、弁護士会それぞれ立場は異なっても「順調なスタート」と口をそろえた。これは、マスコミの大方も共有する評価ではないか。異口同音に語った「裁判員候補の出頭率の高さに胸をなでおろし、裁判員たちの真剣・誠



樋渡 護士長  
長連 厳しい自己研さんをお願  
務日 いたしたい。  
裁日 最高裁判所事務総長は、  
高日 つかまづきのない新制度の  
充日 動きだしに本當に一安心  
崎日 の様子ににじみ出た。日  
山日 検事連会長は念願の「取り  
利日 調べの全面可視化」をマ  
右日 ニフェストに掲げた民主

10・1(木) 司会 和田圭委員 出席 115人  
HP動画・速記録

実な姿勢に敬意を抱いた」「判決後の記者会見に応じる裁判員に感謝したい」などの言葉も、共感できた。

これも期待せずして一致した「裁判員に充実した審理をしてもらえる法廷技術を法曹3者が身につけるためはまだまだ工夫や経験が要る」というのは謙遜ではなからう。組織的な

研修や訓練がしにくい弁護士の皆さんには、特に

お三方の表情を見れば、最高裁判所事務総長は、つかまづきのない新制度の動きだしに本當に一安心の様子ににじみ出た。日検事連会長は念願の「取り調べの全面可視化」をマニフェストに掲げた民主

日本経済新聞特別編集委員兼論説委員 安岡 崇志

### とよだ あきお 豊田 章男 トヨタ自動車社長

10・2(金) 昼食会 司会 宇治敏彦  
副理事長 原田亮介委員 出席 35人  
HP動画・速記録

#### ▼一心に想えば事は成る

「トヨタは大きくなり過ぎて、お客さまから離れてしまっていた」

53歳の若きリーダーは、まず、「反省」を口にした。

世界不況を受け、創業以来の巨額赤字という「どん底」からスタートした豊田章男新体制。

「大きなトヨタから、お客さまを大事にするトヨタへ」「グローバルから「グローバル」に」「トヨタのクルマ造りのDNAを取り戻す」と力を込めた。

しかし、創業家から久しぶりの社長就任は、最悪の「大嵐」の中での苦しい船出である。周囲からの「重圧」は想像以上だろうが、気負いを感じさせないのはさすがだ。

国際ライセンスを持ち、1年間に200台もの外国製新車に試乗する究極の「クルマ野郎」だ。

クルマの将来にふれるや、口調は、一変、情熱的になる。「100年前、米国では自動車の



普及で、1500万頭の輸送馬が「失業」した。100年後はそうした「轍」を踏ませない」とキツパリ。

先行するハイブリッドからEV・燃料電池へと、次代をひらく技術革新への思いを熱っぽく語った。

「新興国では手頃な価格のクルマを、先進国では買い替え促進を」――各副社長に「地域割り」を命じたのも欧米とアジア市場に「即応」する戦略のためだ。

「早期に「健康体」に戻したい」と明確な「メッセージ」を発信した昼食会。大ホールは、325人という新記録の出席者であふれた。

「時代」が求めるリーダーなのか。揮ごうは、毛筆で『心想事成』と。一心に想えば「コト」は成る――中国の知人から贈られた言葉という。豊田新社長の思いはかなうのか。「真価」が問われるのはこれからだ。共同通信社アジア地区総代表

塚越 敏彦

茂木 崇 もぎ たかし  
東京工芸大学専任講師

10・5(月) 研究会「世界の新聞・メディア」① 司会 瀬川至朗委員  
出席 14人 HPに資料のみ掲載

▼デジタルを抱きしめる米紙

「世界の新聞・メディア」研究会がスタートした。背景には「ジャーナリズムの危機」があり、マスメディアとしての新聞・テレビの未来はあるのか、という問題意識がある。

研究会の第1回ゲストとして茂木さんをお呼びした。研究者というよりジャーナリストと呼んでもおかしくない、茂木さんの現場力に魅力を感じたからである。タイムズスクエアをこよなく愛し、年に2〜3回、ニューヨークに出かけ、新聞、雑誌、テレビ、広告、音楽、ブロードウェイといった各産業の取材と調査をする。今年で12年目という。

茂木さんはスピーチのなかで、デジタル時代における新聞社の方向性を①ネット上での課金、②ブランドインゲをやり直した上での減量経営、③寄付の呼びかけとNPOへの



転換——の3点に整理し、それぞれ最新の動向を交えて説明した。

ネット課金では、課金代行会社である「ジャーナリズム・オンライン」

設立の話題。寄付の観点からは、サイト・ブログ寄付システムの「カチングル」の構想を紹介してくれた。

いずれも興味津々だが、やはり、ニューヨークタイムズ(NYT)紙の動向が気になる。NYT紙のペーパー版読者は100万人だが、オンライン版読者は世界に2000万人いる。しかし、「ネットニュースは無料」という認識がはびこる現状で、「収入なき読者増」というジレンマにあえぐ。デジタル技術がもたらす「破壊的イノベーション」を、NYT紙がどう克服していくのか、注目したい。

先はまだ見えない。それでも、米国のメディアはデジタルを「抱きしめ(embrace)」ようとしている。問題は日本だ。デジタルを避けようとする姿勢が依然目立つ。茂木さんは「宅配で守られることの害が大きくなっている」と指摘した。米メディアの経営戦略は3カ月で一変する。いずれかの機会に、茂木さんの話をまたお聞きしたい。

元毎日新聞論説委員 瀬川 至朗

胡偉 フウエイ  
上海交通大学国際公共事務学院院長

10・6(火) 研究会「中国政治の行方と日中関係」司会 坂東賢治委員  
通訳 李臨案 出席 64人

▼2012年党大会で指導者の選挙も



9月に  
行われた  
中国共産  
党の第17  
期中央委  
員会第4  
回総会

(4中全会)では、注目された中央軍事委員会副主席の発表がなかった。習近平国家副主席が軍でもナンバー2になれば、胡锦涛国家主席(党総書記) 退任後の後継者の地位を確定させるはずだったが、その行方は謎のままに残った。

中国共産党内部で何が起きているのか。海外の中国ウオッチャーの間でも様々な観測が出ているが、「なるほど」と思わせる新鮮な分析が他ならぬ中国内部の学者の口から飛び出したのは意外だった。

中国の若手官僚養成機関としても注目される上海交通大学国際公共事務学院の胡偉院長(45)は今後の中国政治の行方について語る中で「(2012年の)第18回党大会では党内選挙で指導者を選ぶことがありう

る」と大胆な予測を披露した。

江沢民前国家主席、胡主席は最高実力者だった鄧小平氏の指名で、トップの座についた。しかし、江氏にせよ、胡氏にせよ、共産革命以来の軍歴、党歴を持ち、毛沢東主席にも一目置かれていた鄧氏のような権威は持ちえない。

誰かの指名では正統性に疑問符がつかねず、次代の指導者にとつても党の選挙で選ばれたという正統性の方が重要になる、というのが胡氏の見立てだ。そう簡単に党内改革が進むかには疑問も残るが、政治分野にも競争原理の導入が不可避という胡氏の分析には十分な説得力がある。

日中関係についても党の見解や政治的リップサービスではなく、現実主義的な主張を聞くことができた。民主党・鳩山政権の誕生を歓迎しながらも、東アジア共同体の推進や歴史問題の解決には指導者個人の意向だけでは簡単に変えられない構造的な問題があると慎重な姿勢を崩さなかった。胡氏は政府のアドバイザー役でもある。理論界の変化が中国政治の変化に結びつくかを注視したい。

毎日新聞外信部長 坂東 賢治

リュック・モンタニエ博士  
世界エイズ研究予防財団理事長

10・7(水)研究会「HIV/エイズ」  
③ 司会 宮田一雄委員 通訳 澄田  
美都子 出席 24人 HP動画

▼エイズ研究の先駆者 衰えぬ意欲



フランス  
のパスツ  
ル研究所で  
エイズの原  
因ウイルス  
が発見され

たのは1983年だった。そのウイルスがHIV(ヒト免疫不全ウイルス)と名付けられる3年も前のことだ。研究グループを束ねていたモンタニエ博士は昨年、部下だったフランスワーズ・バレスヌシ博士とともにノーベル医学生理学賞を受賞した。発見から四半世紀後の受賞は、研究がいかに先駆的だったのかを示してもいる。後続の研究者の努力によりHIV感染を見分ける検査法が確立し、感染した人が長く生きていくことを可能にする抗レトロウイルス剤の三剤併用療法も開発された。かつて「不治の病」とされたエイズのイメージが、「治療可能な慢性疾患」に近い状態にまで変わったのも、モンタニエ博士らの発見があったからだろう。だが、博士自身はまだ、その業績では満足できない。

「HIVに感染した人は1996

年以来、三剤併用療法により、いい状態で生活できるようになった。それでもHIVは体内に残っている。高価で副作用も厳しい薬を毎日、服用しなければならぬ状態では、完全な解決策とは言えない」

それでは、どうすれば完全な解決策になるのでしょうか？

「3〜9カ月間の三剤併用療法によって血液中のウイルスを検査では検出できない量にまで減らす。その後で、治療ワクチンや抗酸化物質を使って患者の免疫力を強化すれば、ウイルスがどこかに隠れていても増えないように抑えられる。この状態なら実現は可能です」

HIVの感染を防ぐ予防ワクチンの開発は困難だが、感染した人の体がウイルスと闘う力を引き出す治療ワクチンなら有望だという。会見ではエイズだけでなく、新型インフルエンザやアルツハイマー病、パーキンソン病といった疾患を防ぐ予防医学の必要性も強調した。研究への意欲はいまも衰えていない。

産経新聞特別記者・編集委員兼論  
説委員 宮田 一雄

福島 瑞穂 消費者・少子化担当相

10・14(水)昼食会 司会 川村  
晃司委員 出席 133人 HP動画

▼成果出し参院選へつなげたい

新政権が誕生し、閣僚入りしてから1カ月。「とてつもなくめまぐるしかった」と振り返る。着任後、まず取り組んだのは補正予算と新年度予算の概算要求の見直しだった。民主党の副大臣と政務官の政務3役で議論しながら、洗い出した。「政治主導は文殊の知恵。チームワークでやっていける」とアピールする。

担当は少子化、消費者、男女共同参画、食品安全など。個々の政策が複数の省庁にまたがり、従来の縦割り行政では対応しきれないケースが目立つ。だが、「フットワーク軽く、自分たちでルールを作っていくことにやりがいを感じる」と意欲的に語る。



9月に発足した消費者庁。「小さいことでも一つひとつ変えていけな

いかを検討している」。賃料が高すぎると批判された移転問題を巡って、ビル管理会社と賃料を減額交渉。発がんの可能性を指摘された食用油「エコナ」は、特定保健用食品の制度化後、初めて表示許可の取り消しを検討する再審査の対象にした。

民主党の小沢一郎幹事長が目指す官僚の国会答弁を禁止する国会法改正について「法律までつくって禁止するのはおかしい」と一線を引く。インド洋での海上自衛隊による給油活動については、民生支援に切り替えるべきだという思いも示した。

連立政権で社民党の主張をどう生かしていくのか。会場の質問もその点に集中した。「新しい政治のいい意味での品質保証をしていく役割をしたい。命を大切に政治と生活再建を実現するべく頑張りたい」と信念を貫く姿勢を示した。来年の参院選に向けては、「政治は一瞬一瞬が勝負。成果を出すことに全力を挙げて、なんとしても(社民党も)躍進したい」と決意を述べた。

朝日新聞生活グループ 上田 学

亀井 静香 郵政改革・金融担当相

10・14(水) 記者会見 司会 長谷川幸洋委員 出席 130人 HP動画

▼自信満々で勝ち誇るが

発言と質疑応答を通し立ち詰めの1時間、自信満々の記者会見だった。熱を込めて語ったのは、金融担当相として提唱したモラトリアム(債務の返済猶予)についてである。

「日本の金融は毛細血管にまで血液が回らない状況。行かなくてもいいところに血液がどンドン流れている」。そうした問題意識から、中小・零細企業向けの返済猶予の法案作りを思い立ったと述べ、「決して貸借関係そのものを遮ろうとするものではない」と強調する。

モラトリアムというギョツとさせる言葉を使いみんなの関心を集めつつ、返済を猶予する融資に信用保証制度を活用したり、返済猶予で焦げ付きに見舞われた金融機関には公的資金を注入する。そんな落とし所も心得ている。が、返済猶予問題にばかり世間の注目が集まっている。が、亀井氏が狙うのは、ともかく銀行の健全性を重視した竹中平蔵金融相時代の銀行検査指針を、借り手に配慮して緩める方向に見直



日本経済新聞論説副委員長

滝田 洋一

すことだろう。「小泉、竹中時代の金融行政とはスパッとおさらば。不本意な人は辞表を出して欲しいといったが、今日まで誰も出してはいない」。勝ち誇った仕事をみせた。

郵政担当相として、郵政の経営問題については「以前の状態(国有化)に戻す気は全然ない」と語った。「北海道から沖縄まで張り巡らされた郵便局のネットワークは国民的財産」としたうえで、「介護や年金業務の拠点に郵便局を使うことが考えられる」という。

「地方で集めた郵政のカネで国債や米国債を買うばかりではいけない。地域社会にカネをどう使うか」とも。気がかりなのは、一連の亀井流の手法が日本経済の不効率な部分への「追い貸し」になりはすまいか、という点だ。「一人で困った人がいれば、助けに行くのが政治家の使命」と述べたが、それは政治家ではなく宗教家の仕事ではあるまいか。

核軍縮国際委員会共同議長 川口順子 元外相 ギャレス・エバンス元豪外相

10・16(金) 記者会見 司会 宮田謙一委員 通訳 池田薫 富永恵子 出席 67人 HP動画

▼核抑止に頼らない「心理変化」へ

オバマ米大統領のノーベル平和賞受賞で核廃絶への機運が世界的に高まるなか、世界各国の賢人らが約1年間にわたって核廃絶への具体的な道筋を検討してきた「核不拔散・核軍縮に関する国際委員会」。その共同議長



の2人が、広島での本会合を前に強調したのは、「世界の不安定化を招かない形でいかに核兵器の役割を減じていくか」(川口氏)という「野心的かつ現実的」(エバンス氏)な道筋だ。

委員会の行動計画では①2012年までの短期②12年から25年までの中期③25年以降の長期——の3段階に分け、中期までに核の弾頭数を劇的に減らしたうえで、25年以降を「廃絶段階」と位置づける。実現へのハードルは高い。広島からは、廃絶の期限を明示しなかったことについて「だったら、いつまでに廃絶するのか」という批判の声も聞こえる。

委員会では、核抑止を否定する平和運動と、核抑止に依存し続ける核保有国とが、たどり続けた平行線をどう交差させるか、という理論(ドクトリン) 面での新たな試みにも取り組む。川口氏は「核兵器がゼロになるまでの間、核抑止が存在することは、(核廃絶とは)矛盾しない」と述べ、核軍縮から核廃絶に移行する具体的な道筋を探る重要性を強調した。

エバンス氏は45年前、学生時代に初めて来日した際に広島を訪れ、心を動かされたという自らの体験を明かした。そのうえで、核抑止に代わる新ドクトリンは、核抑止に頼らずとも安全保障を得られるという「究極的な心理変化」を各国の指導者、国民にもたらすことができるかどうかだと述べた。その実現に向けて、広島や長崎、そして日本の果たす役割は小さくないはずだ。

朝日新聞GLOBAL E副編集長

石合 力

エマニエル・トッド 仏歴史人口学者・家族人類学者



政治的イデオ

▼サルコジ現象は民主制の危機

「フランスの伝統に反する人物が大統領になった。言葉は乱暴だし、個人生活を臆面も無く曝け出す」と、のっけから歯切れのいいサルコジ大統領批難を展開した。サルコジ現象はフランス民主制の危機であつて、その背景分析が新著『デモクラシー以後』の内容であるという。

グローバルイズム下の自由貿易によって、低賃金の海外労働者や移民との競争を強いられ、給与が低下、内需は縮小、民衆の不満が高まっている。フランスはずっと選挙で左と右の選択肢が呈示され、民衆の不満や希求を汲み上げる構造になっていた。ところがいまや左右エリートはともに自由貿易を信奉し、サルコジ大統領は移民排斥の極右を取り込むとともに、社会党から閣僚を任命するなど左をも取り込み、その社会党はサルコジ政権にすり寄つて同調している。いまフランスは一切の政治的イデオロギーが解体している「無重力状態」にあつて、教育格差の拡大によるエリートの寡頭制によって民主制は衰退の過程に足を突っ込んでいる。選択をおこなう普通選挙の意味が失われているという。左の立場のトッド氏は、サルコジ批難と同等に、社会党の不甲斐なさを嘆いているようにも聞こえた。

ではどうしたらよいか。トッド氏はヨーロッパが「一時的」に協動的な保護貿易主義をとることによって、給与の再上昇と内需拡大をはかり、民族的な排外主義に向かうのを防ぎ、普通選挙不要という事態を阻止できるという。自由貿易に反対ではないが、ヨーロッパ・ナシヨナリズム（という言葉があれば）の匂いが漂っていると感じたのはひがみか。

1976年に乳幼児死亡率の上昇を根拠にソ連の崩壊を予告、2002年に『帝国以後』で「世界はもはやアメリカを必要としない」とアメリカに弔辞を突きつけたトッド氏。フランス民主制危機の予告は、他の先進民主制国にも当てはまるのかと、話を聞き終えて考えた。

元毎日新聞論説委員 近藤 健

10・19（月）著者と語る 司会 玉利伸吾委員 通訳 三浦信孝（中央大学教授） 出席 72人 HP動画

▼wait and seeのフシントン



鳩山政権発足から1カ月。インド洋での給油活動から撤退を表明したり、普

天間基地移転の見直しを示唆したりとめまぐるしい動きの中で、ワシントンが新政権をどう見ているのか気になる。知日派の代表格、カルダー氏のメッセージは、大局を見失うなということだった。

「普天間飛行場の移設で数十メートル移動させるとか、そんな問題は何とかありませんよ。オバマ政権は、びっくりするぐらい日米問題に高い優先順位を与えている。だから、根本の問題をきちんと見据えて対処してほしい」という。根本の問題とは、日米同盟の安定化と、戦略上の共通理解の進展だ。今年2月にまとまった米軍再編と海兵隊のグアム移転に関するパッケージは、西太平洋地域全体の安定のためのグアムの重要性に対する共通認識を持って進めなく

ケント・カルダー ジョンズ・ホプキンス大学ライシヤワー東アジア研究所長

10・19（月）研究会「日米中」① 司会 会田弘継委員 通訳 池田薫 出席 129人 HP動画・速記録

てはいけないし、新たな脅威に対処するためのミサイル防衛協力や対テロ作戦での協力が、同盟の根本的な戦略問題だと主張した。

「新政権は何か新しいことをやりたいと考えるもの。それは米国でも同じ。政権交代は民主主義の活力が発揮されたものと見て、好ましく見ているし、今は、wait and see（様子を見てみよう）というのが、新政権への態度」と、ワシントンの雰囲気や説明する一方で、米国の対中接近が進んでいるのではないかという見方には、「中国の存在は大きくなっていくし、エネルギー問題などでは日米中で対話を重ねる必要がある。でも、安保問題では米中とか日米中はない。日米中韓といった他国間協議の枠組みか、日米2国間でしっかりと協議をしなくてはいけない」と断言する。

日米関係に気を配る知日派のバイブは、このところやせ細ってくるばかりだが、カルダー氏の揺らぎのない発言に、少し安堵の気持ちを持ったところである。

読売新聞調査研究本部主任研究員 飯山 雅史

藤井 裕久 財務相

10・20(火) 記者会見 司会 小此木潔  
委員 出席 160人 HP動画

▼経済あつての財政を説く最長老

鳩山内閣最長老の77歳。しかし、年齢を感じさせないエネルギーな行動は、後輩である財務官僚たちも舌を巻く。まず、自身は財政健全化主義者だと前置きし、際限なき財政出動に否定的な立場であることを強調。その上で「経済あつての財政。財政あつての経済ではない」と持論を語り、昭和恐慌以来とも評される経済危機には、それに応じた対応が必要だと述べた。



「麻生内閣の44兆円よりも減らす」。税収見通しが厳しい中で、政策実現、財政規律の維持、歳入確保の並立という困難な方程式に挑むことになる。

財務省の使命は「基本に流れる考え方は資源配分をどうするかだ。その資源を作るのは皆さん方」と、論旨は明快かつ分かりやすい。給付付き税額控除と、その前提になる納税者番号制度の導入を提唱し、低所得層に配慮した税制へ改めていく考えを表明。自公政権下で広がった所得格差を是正し、貧困を解消できるかが鳩山内閣に与えられた重要な使命、と自覚しているように感じた。冷静な語り口が、一度だけ熱くな

った。子ども手当などマニフェストの目玉政策が「ばらまき」と批判を受けたことへの反論だ。「ばらまきは大嘘。経済運営の構造が変わっている」と、経済成長が大型公共投資と過度の輸出依存で成り立っていた時代ではない、と説いた。

概算要求規模が95兆円余りにふくらんだ2010年度予算編成への取り組みにも言及し「92兆円よりも切らなければいけない」と、査定には厳しい姿勢で臨むと宣言。一方で、国債発行額は

官僚出身者にありがちな堅苦しい言葉はなく、分かりやすく噛み砕いて伝えようという姿勢が伝わってきた。予算は政権の思想そのものだ。鳩山内閣が発信するメッセージは、国民にどう響くのだろうか。東京新聞経済部 小松田健一

赤松 広隆 農水相

10・21(水) 昼食会 司会 柴田隆理事  
影山日出夫委員 出席 112人 HP動画

▼揮「ごう」に「居処恭」 その心は？

44歳で日本社会党の書記長になった若き革新政党的リーダーが、約16年半を経て農林水産相に就任した。本人が「正直、びっくりした」と言うくらいだから、官僚側も身構えた。

これまで、農水省は自民党と二人三脚で農政を展開し、総選挙前の6月、井出道雄事務次官は、民主党の農政を「現実的でない」などと、公然と批判した。

組閣翌日の9月17日、赤松農相は、同省幹部による恒例の「初登庁お出迎え」を拒否。「即時、井出次官の更迭もありうる」と、取材現場は緊張した。しかし、意外や意外。赤松農相は、官僚側とあっさり「歴史的和解」をした。これは「友愛」の精神なのか。

昼食会後の会見で、代表質問者は開口一番、「官僚に甘いのではないか」と鋭く問うた。農相は「役人を批判するのはたやすいことだが、それだけでは変わらない。仕組みを変えないと



許していないのだから。

共同通信編集委員兼論説委員 石井 勇人

語り口は温和だが、その意味は重く冷徹だ。事務次官を残留させた真意は、「面従腹背」を許さないための「間接統治」だと、私は解釈した。民主党の政策を推進するために、「許されざる者」には十分に働いて償ってもらおう。サボタージュしたら、その時こそぼつさり解任か。想像を巡らしているうちに、会見はあっという間に終わってしまった。最後に、赤松農相は、ゲスト・ブツクに「居処恭」と記帳し、「どこにいても謙虚さを忘れず、初心を忘れないよう、自分に向けて書いた」と説明した。

これは、論語(子路)の一節で、「執事敬、與人忠、雖之夷狄、不可棄也」と続く。恭、敬、忠は、野蛮な未開地においても棄ててはならない行動原理である、というような意味だ。やはり、赤松農相は、心底では決して農水官僚を

## ヤン・ペーター・バルケネンデ オランダ首相

10・27(火) 記者会見 司会 伊藤  
修一理事 通訳 池田薫 大野理恵  
出席 56人 HP動画

### ▼「欧州の顔」有力候補の自負

徳川幕府が公式にオランダとの通商を認めてから今年で400年。初来日の会見は日蘭の友好促進が中心になるはずだったが、いささか違った。

欧州連合(EU)初代大統領(常任議長)の有力候補として名前が取りざたされるさなか。リスボン条約発効、大統領選挙の見通しなど、質問はむしろEU問題に集中した。

「誰が大統領になるのか、誰にもわかりません」「大出国身者がなるのか、小国出身者か、それはたいした問題ではありません」

自身に関わることはさらりとかわしながらも戦後、自国を含む6カ国で発足、半世紀余を経て27カ国に拡大したEUの将来像となると自ずと



熱い口調になった。

「重要なことは、欧州議会、欧州委員会、欧州理事会をどう調整しているか、という点です」「環境問題から安保政策まで、今やEUが抱えている問題は多岐にわたります」「リスボン条約も、拡大するEUを効率的、透明にするのが目的ですから」

早口で精力的な話しぶり。46歳で首相に就任して以来すでに7年、言外に次世代のEU指導者としての自負がにじむようだ。

「日蘭関係についてもしゃべらせてください」。会場の笑いを誘いながら披露した滞在中の主要行事は、皇居訪問、鳩山首相との会談、相互の投資促進、イノベーションに関する各種会合など。蘭学に通じていた福沢諭吉創建の慶応大学では名誉博士号を受け、記念講演も。

その講演では、横浜の保土ヶ谷墓地を訪れ第二次大戦中のオランダ兵犠牲者の墓に献花した話も紹介、日蘭関係の負の面にも触れた。

オランダから「欧州の顔」が生まれるか否か。その動向からしばらく目が離せそうにない。

東京新聞論説委員

安藤 徹

## 青木 眞 感染症コンサルタント

10・28(水) 研究会「感染症診療の原則」 司会 宮田一雄委員  
出席 42人 HP動画予定

### ▼タミフルの大量使用を懸念



青木氏は「薬漬け」と言われてきた医療界で、抗生物質などの使います

ぎに警鐘を鳴らしてきた感染症専門医。流行する新型インフルエンザへの対処について、示唆に富んだ講演となった。

まず、感染症診療の原則について、「どの病院でも診る態勢が必要」と述べた。エイズや結核では、診療を受け持つ病院が指定されているが、患者はそれ以外の病院に行くことも多い。その場合、病気が見逃されるからだ。

次に今春、新型インフルエンザが海外で発生した際、空港で厳重な検査が行われたことに言及。「検査や隔離では、インフルエンザの感染拡大を防げないことは感染症疫学の常識」と指摘したうえで、専門家の養成

の必要性を説いた。

今後の対策については、「すでにパンク状態にある医療機関に、負荷をかけないことが大切」とした。タミフルなどの治療薬や詳しい検査は、多くの場合は必要ないが、医師は「万一、悪化した時に訴えられたら」との不安から処方や検査を行い、時間と労力をとられているのが現状だという。

タミフルを巡っては、米国では「ふだん健康な人には原則として必要ない」とされているのに対し、日本の感染症学会は「全員に使う」方針を打ち出している。日本はタミフルの使用量が世界の7割を占めるとされており、青木氏は「薬が効かない耐性ウイルスを広げる恐れがある」と、薬の大量使用に懸念を表明した。

新型インフルエンザという未知の感染症の登場に浮足立ち、「検査による水際作戦」「薬の大量使用」など効果が定かでない策に走る日本。頭を冷やして対処することが必要だと改めて感じた。

読売新聞医療情報部長

田中 秀一

ジョン・キー ニュージーランド首相

10・30(金) 記者会見 司会  
高畑昭男委員 通訳 西村好美  
出席 57人 HP動画

▼最大の関心はEPA / FTA締結

ニュージーランドでは、2008年11月の総選挙で国民党が勝利して政権交代があった。9年ぶりに労働党から政権を奪回した立役者のキー首相が今回、日本政府の公式実務訪問賓客として、就任後初来日した。



反応であろう。

キー首相は、ニュージーランドが

小国であることや、季節が反対なので日本の農産品との競合を避けられることなどを挙げ、「日本の農業への脅威にはならない」と強調した。だが、民主党は、衆院選前に、日米FTAについて、マニフェストの表現を「締結」から「交渉を促進」に変更した。農村票は、民主党にとって貴重な支持層となりつつあり、農産品に影響が予想される米、豪、ニュージーランドなどのEPA / FTAで政治的決断を行うことは、自民党政権時代以上に難しいのではないかと。

キー首相は、投資銀行家としての経歴が長く、経済問題に強い。会見の冒頭で「自分の政権の焦点は経済成長にある」と言い切った。日本との関係で、最大の関心は経済連携協定(EPA)または自由貿易協定(FTA)の締結にある。

鳩山由起夫首相との首脳会談でも、この件を提起し、長い時間を費やして話をしたという。同首相によると、鳩山首相の反応は「積極的だった」というが、日本側の説明では、「乳製品や牛肉等、我が国にとりセンシティブな品目の比重が高いという面を指摘し、EPA / FTAには慎重な日本の立場を説明した」とある。どう見てもこれは「消極的」な

なお、キー首相は、非核政策には変更がないと言いつつ、国民党内には、非核政策を見直し、米国との同盟関係復活を望む声もあるようだが、内政上はマイナスにしかならぬとみられる。

朝日新聞外交・国際グループ

坂口 智

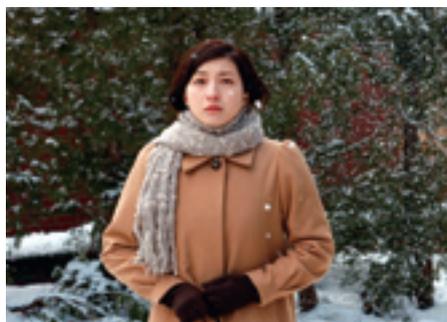
前半は緊迫感がある。新婚7日後に夫(西島秀俊)が失踪する。夫を探すために新妻(広末涼子)は金沢へ行き、夫の秘密の領域に踏み込んでいく。自殺者、義兄の不自然な行動、煉瓦会社の社長夫人(中谷美紀)と受付嬢(木村多江)との出会い。それらが日本海の荒涼たる風景と重なってサスペンスを盛り上げる。

しかし、後半に展開される連続殺人や、社長(鹿賀丈史)の自殺は、俳優たちの熱演の割にはリアリティが感じられない。

社長夫人と受付嬢が、戦争直後に米兵相手のパンパンをしていた、というのが物語の核心なのだが、それを隠すために、次々に人を殺していく展開には、強引さを感じる。

原作は、松本清張自身が代表作の一つに数えた作品。日本人が必死に生きた戦争直後から、昭和30年代前半に続く時代を背景に、不幸だが懸命に生きる女性たちの姿と、夫を探

ゼロの焦点 (10・13)



時代を超えた普遍性が必要

す妻のひたむきな姿が作品を成り立たせていたのだと思う。しかし、小説が発表されてから50年。その間に社会も時代も、そして日本人も変わった。相手の素性を全く知らぬままに結婚することは、今の女性には考えられないだろう。そして何よりも、性に対する考え方が変わった。

現代は、女子中高生が援助交際という名の売春をする時代。AV女優から政治家になることも出来る社会である。

そんな時代に、50年前の日本を再現して、説得力ある映画を作り上げるには「時代を超えた普遍性」が必要だ。例えば同じ清張作品の映画「砂の器」には、その普遍性が確かにあった。しかし、この映画からは「パンパンの何が悪いのよ」——そんな声が聞こえてきそう。

産経新聞出版・シニアアドバイザー

山本 泰夫

©2009「ゼロの焦点」製作委員会

前原大臣 国交省クラブ

## 連日の一面トップ級ニュース

▼位川 一郎  
(毎日新聞経済部)

もう半年ぐらいたったような気がする。前原誠司国土交通相の就任から1カ月半近くたった執筆時点での実感である。この間、国交省ではあまりに多くのことが起こりすぎた。自公政権は今や遠い昔だ。

就任の夜の「八ッ場ダム中止」発言に始まって、「日本航空再建の有識者会議廃止とタスクフォースの設置」「空港特別会計の見直し」「国幹



前原大臣の定例会見 開始1時間前には満席に 毎日新聞社提供

会議の廃止」「羽田ハブ空港化」「公共事業費14%削減」——と、前原国交相は休む間もなくニュースを発信した。

## 定例会見に100人前後

時の人になった国交相の定例会見（火、金曜の午前）には毎回100人前後の記者が出席し、熱気と緊張感があふれる。国交省5階の大会見室は記者が入りきれないため、隣の中会見室との間仕切りを取り除いてあるが、それでも開始1時間前には席が埋まって「立ち見」が出ることも多い。会見が始まって30分以上たっても「大臣、大臣」の声が続けられず、幹事社は質問を打ち切らざるを得ない。

10月9日の会見は象徴的だった。「ダム凍結」「直轄事業負担金の段階的廃止」というそれぞれ一面トップ級の発言があったのに加えて、「JR福知山線事故の報告書漏えい問題

で検証チーム」「北陸新幹線の工事計画を認可」という重要ニュースも発表。夕刊の締め切りが迫る時間帯に、私と同僚記者3人がそれぞれ別の原稿を書き、もう1人が会見のメモを起こす忙しさだった。同僚と「この会見だけで一面を全部埋められる」と苦笑し合ったほどだ。

定例会見だけでなく、出張先やテレビ出演後の「ぶら下がり」でも国交相は重大発言をする。八ッ場ダム中止や羽田ハブ空港化はぶら下がりでの発言だった。とにかく、どこで何が飛び出すか分からず気が抜けないのだ。

## 全力疾走続けて大丈夫？

前原国交相の全力疾走は、政権交代に伴う高揚感、意気込みゆえだろう。民主党が衆院選のマニフェストに掲げた政策を忠実に実行したい、という律儀さもあるのだろう。高速道路無料化に反対する持論を封印して「推進」を言うところからも、それはうかがえる。

ただ、第三者の目で見ると「こんなに手を広げて大丈夫か」と余計な心配もしたくなる。八ッ場ダム問題では、中止に反対する流域自治体との間でどう落としどころを探るのか。道路など地元の公共事業に熱心

な民主党議員に削減を納得させられるのか。国会審議で野党・自民党のさまざまな追及をかわせるのか…。

## 省内の意思疎通は：

事務方との関係はまだぎこちないようだ。職員への就任あいさつでは「今までの皆さんの仕事を否定しない」と協力を呼びかけたが、十分な意思疎通があるようには見えない。09年度補正予算の執行停止では、見直し作業を政務三役だけで行い、担当部局には発表直前まで内容を明かさなかった。日航問題では、国交相直属のタスクフォースによる再建築づくりに国交省航空局がほとんど関与させてもらえなかったという。

国交相は「政治主導」「脱官僚依存」を軌道に乗せるうえで最初が肝心、と考えているのかもしれない。だが、省内に「もう少し我々をうまく使ってほしい」という声があるのも事実だ。目指す方向性は理解できる政策が多いだけに、ボタンのかけ違いでつまずくような事態になってはもったいないと思う。

それにしても、もう少々仕事のペースを緩めてもらえるとありがたい——担当記者の正直な感想である。

いがわ・いちろう 1988年入社 08年4月から国交省担当 経済部編集委員

国内第1号 世界ジオパークに認定

「火山と共生」  
観光で再生

■松本 文泰

(長崎新聞島原支局)



上空から見た島原半島 噴火災害を乗り越え 観光振興による地域活性化が期待される 左奥は平成新山 長崎新聞社提供

「これまで火山災害というマイナ  
ス面ばかりが知られてきたが、よう  
やくプラス面でアピールできるとこ  
ろまできた」  
8月23日、長崎県島原半島に「世  
界ジオパーク認定」の朗報が届いた。  
認定は糸魚川（新潟県）、洞爺湖有  
珠山（北海道）とともに国内第1号。  
準備に奔走してきた地元関係者は、  
万感の思いで喜びをかみしめた。  
1990年11月に始まった雲仙・  
普賢岳の噴火災害。91年6月3日に  
は、消防団員や警察官、マスコミ関  
係者ら43人が犠牲になった大火砕流  
惨事が発生。その後も火砕流、土石

流が頻発し、住民は長期の避難生活  
を強いられた。火山活動は96年によ  
うやく終息。住宅や道路などハイド  
面の被害に加え、基幹産業の観光の  
落ち込み、人口減少など深刻なダメ  
ージを受けた。  
それでも、全国からの支援も受け、  
行政と住民一体の取り組みでまちは  
復興を遂げた。噴火災害で得た教訓  
を国内外に発信するため、島原市は  
2007年開催の「第5回火山都市  
国際会議」を誘致。人口5万人の地  
方大都市での国際会議はチャレンジ  
事業といえたが、市民の盛り上がり  
で成功し、国内外の火山、防災研究  
者から高い評価を得た。

国際会議の成果を生かし、地  
質遺産を地域活性化につなげよ  
うと、島原、雲仙、南島原の3  
市は08年2月、観光、ボランテ  
ィア団体、研究機関などと島原  
半島ジオパーク推進連絡協議会  
（会長・横田修一郎島原市長）  
を設立。ジオサイト（地質学的  
見どころ）への解説板の設置や  
申請書の提出など世界ジオパー  
ク認定の準備を進める一方、半  
島を訪れる見学者を案内する  
「ボランティアガイド」の養成  
講座を開いた。

講座には市民約130人が参  
加。地学の基礎や分かりやすいガイ  
ドの方法を学んだ。半島には国の天  
然記念物に指定されている普賢岳の  
溶岩ドーム「平成新山」や、雲仙地  
獄、火砕流で焼失した旧大野木場小  
学校の被災遺構など地球の営みが体  
感できる地質遺産が数多くある。参  
加者からは「郷土の素晴らしさ、誇  
りを再認識した」との声が聞かれた。  
世界ジオパークは「世界遺産の地  
質版」とも位置付けられる。横田島  
原市長は「島原半島を優れたジオパ  
ークとして整備し、世界に名だたる  
観光地として育て上げたい」と意気  
込む。江戸時代と平成の噴火災害に

苦しみながら、それを乗り越えてき  
た島原半島。豊かな土壌が生み出す  
農産物や温泉、湧水（ゆうすい）な  
どの恵みを楽しみ、火山と共生して  
きた人々の歩みが綿々と続いている。  
その価値が世界に認められた。  
8月中旬に行われた世界ジオパー  
クネットワークの現地審査では、解  
説板の改善やPR強化の必要性など  
さまざまな指摘を受けた。4年ごと  
の再審査も義務付けられており、地  
元関係者は「これからがスタート」  
と気を引き締める。島原ならではの  
魅力的なジオパークをいかににつくり  
上げ、地域振興につなげていくか。  
災害復興からの新たなステップを見  
つめていきたい。

まつもと・ふみやす 1993年入社  
整理部 報道部などを経て2007年4  
月から島原支局

一口メモ ジオパーク 地形や地  
質、火山、断層など地球活動の遺産  
を主な見どころとする自然公園。遺  
産を保全しながら、教育や観光、地  
域振興に役立てる。2004年、国連教  
育科学文化機関（ユネスコ）の支援  
を受けた「世界ジオパークネットワ  
ーク（GGN、事務局パリ）」が設  
立され、これまでに中国や欧州など  
19カ国64地域が加盟している。

## 20年後に実った『リップ・サービス』

— 追悼・金大中韓国元大統領 —



小栗 敬太郎

金大中氏が亡くなった。死刑判決も受けた反体制運動家から大統領まで、波瀾万丈の85年の生涯だったが、最期の床は病院で安らかだったときく。ご冥福を祈る。

### ■初の韓国語学留学生として

東京都心のホテルに白昼堂々踏み込んで政敵を袋詰めにし小舟でソウルまで拉致した1973年の「金大中事件」。KCIA要員の指紋が現場で検出され軍事政権の悪役イメージが極まった一方、金大中氏は被害者として著名人になった。「良心的抵抗派」という非政治的なイメージがすんなり定着したのは、この事件をきっかけに氏を知った人が多かったのだから当然かもしれない。

私が氏に最初に接したのは事件の

3年前、語学留学生として滞在していたソウルだった。朝日新聞の語学留学は英独仏中露に限られていたが、初めて韓国語が加わった。植民地解放から四半世紀が過ぎ、日本語を知らない世代が登場してきたからだ。「韓国語」で韓国取材する日本人記者」は当時では珍しがられた。

1970年10月30日、ソウルのホテルで外信記者会が野党大統領候補を招いて開いた会見。脂の乗りきった40歳代半ばの氏は火を噴く勢いで政見を披露、「弁舌に秀で野心満々」というのが第一印象だった。

75年特派員として赴任。使命感の強さを尊敬すると共に、弾圧下にある「弱さ」を転じて軍事政権の不当を訴える武器に仕立てる戦略家の才にも感心した。同氏を巡る状況は

様々に変化したが、「私の金大中」像は第一印象の延長上にあった。

78年12月27日、民主救国宣言事件で2年10カ月に及ぶ病院軟禁からの釈放が、特派員を終え帰国直前の「最後のソウル電」となった。

### ■釈放手記「空が恋しかった」

大晦日の朝刊第3総合面を埋めた独占手記は、面会に通う家族らを通じて事前に何度も頼んであったとはいえ、釈放後すぐに長文が書けるはずはない。病院では執筆禁止で「鉛筆一本がどんなに欲しかったか」と後で聞いた。

小さな獄窓から外を見た「空が恋しかった」という題字と署名は本人が万年筆で書いてくれたが、大部分は口述筆記だった。

手記を得ることが出来た陰には、反体制派とのパイプが太かった鄭平相氏の密かな活躍があった。「言論弾圧」の悪印象が強い軍事政権だが、日本人特派員である私の取材・執筆に直接介入したことはなく、KCIAとの関係は隠微な神経戦だった。しかし韓国人助手は地元紙と同様、露骨な圧力と監視下にあった。

手記で興味があったのは、政敵である朴正熙大統領を意識して尋ねた独裁者論だった。氏も政治家である限り、崇高な使命感だけでなく、熱い権力志向が内部に渦巻いていても責められることでは全くない。政治記者としてリアリティのある本音の一端でも引き出したかった。

その問いに対し、弾圧の元凶である朴正熙氏に直接触れるのはさすがに避けたが、秦の始皇帝・織田信長・ピョートル大帝の名前を挙げて「その時代の要請に応えた」と肯定評価したのだ。

当時の切り抜き帳を取り出して塵を払ってみると、長文過ぎて削った部分を赤ペンで書き添えてあった。「独裁者を評価するのかと誤解されるので付け加えると、大衆の覚醒と能力が不十分だった当時の歴史的段階では独裁しかなかったのが現実だった。彼らは少なくとも時代の要請



1998年1月22日 大統領選挙に当選後 外信として初めて朝日新聞と会見をする金大中氏(右) 左奥は松下宗之社長(左)は筆者(撮影・吉村功志記者)

を前進させた点を評価したのだ」

口述筆記を終え引き揚げるとき玄関で「大統領になった暁には単独会見に応じて欲しい」と持ちかけた。おぼろな記憶だが、氏は苦笑気味に口元をゆるめ握手したと思う。釈放されても軟禁の場所が病院から自宅に変わっただけで活動の自由もない状態では、本気で約束を取り付けるというより「いつか大統領になれるといいね、死なずにがんばれよ」という思いの、友人として激励のリップ・サービスが本音だった。

20年後、その「まさか」が現実にな

ってしてしまった。東京編集局長だった私は「単独会見をなんとしても取れ」と外報部に発破を掛けた。

### 監獄学校で勝海舟も読破

リップ・サービス代わりにの大昔の「約束」に効き目を期待できるはずもなく、欧米メディアも含めた激しい競争を勝ち抜けたのは、小田川興君ら後輩の歴代ソウル支局経験者が本人や側近に築いた人脈と、東亜日報などの支援のお蔭だった。20年前、釈放手記で活躍した鄭乎相氏はその後一段と厳しくなった韓国政治の閉塞を逃れて渡米し、その地の土となっていた。

1998年1月22日、青瓦台(大統領府)近くに設置されていた政権引き継ぎ委員会本部。まともな政権交代も実現できないまま自民党「永久政権」下に安住する日本政治を取材した身として「政治では韓国に一步先んじられたなあ」という感慨を抱いて会見の部屋に入った。会見に立ち会う予定だった松下宗之社長(故人)が午前中東京で所用ができ、社有機で金浦空港に到着、パトカーの先導で駆けつけている最中という綱渡り。「待つ間ぼつぼつ始めてい

ましようか」ということになった。国家元首とのインタビューだから先方の言語を使うのが礼儀と30年近く前習った韓国語の錆を払って質問すると、流ちょうな日本語が返ってきた。獄中で七百冊を読破した勉強家で、勝海舟伝記まで含まれていると聞いた。本人も「監獄こそ私の学校」と言っていた。

朝刊外報面2頁をつぶして展開した会見内容は省略するが、社長到着を間に合わせるため会見時間がたっぷりあったのが幸い、答えが予測できる目先の政治の話に限らず、昔話を含めゆつたり問答できた。

### 朴氏と会話の希望実らず

20年前の釈放手記の始皇帝・織田信長・ピョートル大帝のことは覚えていて「この三人が今ここに出てきても話が通じる気がする」と語り、手記では直接言及を避けた朴正熙氏についても今度は「朴氏は私を殺そうとしたが私は誰もエネミー(敵)と思つたことはない。亡くなる半年前に人を介して直接会って話し合おうと提案した。1カ月待ったが結局ノーだった。今でも生存中に一回会いたかと思つている」と心情籠もる答えを得た。

問答に添えてソウルから送信した

会見記に「金大中氏には取材を通じて、いくつかの顔を見てきた。政策に明るく弁舌さわやかな野党政治家。人権尊重を唯一の武器に掲げて強権政治を批判する反体制運動家。獄窓に寄つてくる雀を唯一の友として歴史や宗教の世界に思いを馳せる思想家。これからは本人が望むと望まないにかかわらず権力者の顔を見せることになる」と書き、「実像、徹底した現実政治家」の見出しを敢えて立てさせた。

権力集中と過剰忠誠が大統領を裸の王様に祭り上げがちな政治風土の中で、権力者としての金大中大統領がどう振る舞ったか、その評価は後輩特派員が伝えている。現地にはない私が憶測で蛇足を加えるのは慎むのが職業倫理というものだろう。

金大中氏を死の寸前まで追い込んだ朴正熙氏は側近中の側近であった警護室長に既に射殺されていた。それから30年後、黄泉で顔を合わせた二人のライバルはどんな会話を交わしているのだろうか。合掌

おぐり・けいたろう会員 1941年生まれ 64年朝日新聞社入社 ソウル特派員 論説委員 政治部長 東京編集局長 常務取締役・総務労務担当 2001年朝日新聞退社 海外新聞普及株式会社社長・会長 08年退任

リレー  
エッセー⑫私が出会った  
松本清張さん鬱積が吹っ切れた  
朝日機の空の旅

▶ 中江 利忠



朝日ジェット機前での清張さんと筆者

主任に栄転して、3年後に独立する作家の道を固めつつあった。

清張さんの付き合いは、昭和42年から47年にかけて「週刊朝日」に連載された『黒の様式』『黒の図説』シリーズの取材で、当時経済部デスクだった私が東京財界の裏話をご進講したのが始まりだった。その後の

ら見たい、とおっしゃるので、快諾して同乗することになった。

平成3年12月9日、羽田―博多（1泊）―小松―羽田のコースで『点と線』の福岡・香椎、『ゼロの焦点』の能登金剛など十カ所の舞台を俯瞰。清張さんは長年の夢がかなった思いで青年カメラマンのように愛

用のカメラを駆使し、時にはシートベルトをはずして左の窓、右の窓と行き来しながらシャッターを押し続けた。そして隠岐から能登に向かっていた時、清

張さんが突然、私のルーツの丹後を通ろう、と勧める一幕があった。蘇我・物部の乱を逃れ

て丹後の海岸に一時避難した、聖徳太子母親の間人（はしうと）皇后が、乱が治まって帰京する時、村に自分の名前を冠してよいと告げると、村

民は畏れ多いと字だけ頂いて、皇后が退座するのを惜しみ、「たいざ」と読ませることにした（今は京丹後市丹後町間人）話や、皇后お付きの

機に乗って自分の作品の舞台を空か

榎負（ゆげい）今でいう皇宮警察の一人に、ここに残って子孫をつくった「穂見中江鷹」というのがいて私の先祖らしい、という話を、清張さんはよく覚えてくれていたのである。

「こんど案内してよ」と言われた清張さんが、古墳時代から飛鳥時代への過渡期に朝廷周辺の陰謀と戦乱や近親との再婚など、どろどろした歴史の激流に翻弄された間人皇后に、社会派ミステリー作家としての食指を動かさないわけがなかった。

清張さん他界8カ月前の一コマだが、「大組織の中の歯車のネジにも値しなかった」朝日新聞時代の鬱積が一遍に吹っ切れたこの空の旅が、遺族の希望で私一人だけに追悼の辞を読ませる「おわかれの会」の式次第ともなってしまう。

なかえ・としただ会員（元朝日新聞社長 元日本記者クラブ理事長）

私の松本清張さんとの四半世紀にわたる付き合いの中で、ひとつだけ心残りなことがある。

それは、私のルーツ、丹後を舞台にした時代小説を書きたい意向をもらしたまま、実現せずに旅立たれてしまったことである。

私が朝日新聞に入社したのが昭和28（1953）年4月、この年の1月に清張さんの『或る「小倉日記」伝』が芥川賞に決定、11月には14年間の朝日西部本社広告部意匠係の生活から東京本社と同係

東京編集局長時代に『迷走地図』を本紙に掲載、社長になって最初の「朝日賞」受賞者に清張さんが入ったこともあって、たびたび夕食を共にして意見を交換する機会に恵まれた。

そんな席で突然、朝日のジェット機に乗って自分の作品の舞台を空か

消費税をどうするか—再分配と負担の視点から

小此木 潔

朝日新聞論説副主幹

危機を超える改革へ 消費税問題には、連立方程式を解くような複雑さがある。「財政赤字が大きいから、増税は不可避だ」という論理だけでは解決しない。

「折り重なる危機をいかに克服するか」を考えると、所得再分配の必要性や「逆進性を消す集め方と配り方」が課題になる。さらに「景気を失速させない方法」はどうあるべきか、というふうな方程式を立てて解いてみると……。その作業に挑んだのが本書である。

(岩波新書 735円)

松本清張 時代の闇を見つめた作家

権田 萬治

(日本新聞協会出身・ミステリー文学資料館館長)

清張の多彩な業績に光を当てる『点と線』、『砂の器』、『ゼロの焦点』など松本清張が優れた社会派推理小説の書き手であることはよく知られている。しかし、氏の業績は、歴史小

説から現代小説、『昭和史発掘』や米軍占領下の日本の裏面史の『日本の黒い霧』、さらには、『清張通史』に結晶する古代史研究などその守備範囲はきわめて広範囲に及ぶ。このため、これらすべてについて論究した評論はほとんど皆無だった。本書はその空白を埋めようとする試みである。清張ファンの方には是非一読いただきたい。

(文藝春秋 1,600円)

保守の劣化はなぜ起きたのか

花岡 信昭

(産経新聞出身)

政権交代への軌跡は浮かんできたか 2年間、古巣の産経新聞で「政論探究」という本音ベースの政治コラムを毎週書いてきた。新聞はナマモノだから、すでに賞味期限切れと想っていたが、この一大政変で「自民惨敗に至る予兆が浮かぶのでは」と勧めてくれる人がいて、1章だけ書き下ろしを加え、ばたばたと出版した。タイトルは仰々しいが、そういう事情だからあまり威張れない。編集側は1回分を見開きとし、読みやすいスタイルにつくってくれた。

(産経新聞出版 1,500円)

会議報告

第306回会報委員会

(10・13 小会議室)

10月号について意見交換した後、11月号、12月号の編集について協議した。明年1月号の「新春随想」を藤原作弥会員に依頼することを決定した。

出席 住田委員長、小西、近藤、菅谷、富田、羽原、枇杷田、堀の各委員。

第386回会員資格委員会

(10・19 小会議室)

11月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 朝倉委員長、森、布施、金子、近藤、坂本、齋藤、川嶋、工藤の各委員。

第391回企画委員会

(10・22 宴会場)

司会担当の委員が行事を報告した後、今後のゲスト候補などについて協議した。

法人会員代表変更

大阪放送

(新) 鈴木 理司 代表取締役社長  
(旧) 佐藤 賢三

出席 船橋委員長、宮田(謙)、坂東、原田、玉利、宮田(一)、高畑、会田、田崎、影山、井田、和田、広瀬、石郷岡、泉、園田、瀬川の各委員。

第477回理事会(書面)

1. クラブ賞規約と内規にもとづき、2010年度日本記者クラブ賞の実施を決定したほか、左記のクラブ賞推薦委員の一部交代を了承した。

(新) 住川治人・元朝日新聞論説副主幹(旧・小田隆裕氏)

2. 左記の理事の一部交代を承認した。山陽新聞社

(新) 土佐直樹 執行役員東京支社長  
(旧) 越宗孝昌

「クラブ賞」候補者の推薦を

締切は明年1月30日です

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を「日本記者クラブ賞」候補としてご推薦ください。

「選考基準」は次の通りです。

① 現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である(現役という意味は現に活動しているということ、故人

は対象としない)。

② スクーパ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。

③ その存在および業績が、ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。

会員および会員社に属する方々が候補有資格者です。詳細は事務局(3503-2752 長谷川)へお問い合わせください。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■ 渋谷「ぶる」のママ・平野薫子さんをしのぶ会

7月に亡くなった、渋谷「のんべえ横丁」の飲み屋「ぶる」のママ・平野薫子さんをしのぶ会が行われた。マスコミ人、演劇関係者らから愛された店で、平野さんは「バアさん」と親しまれていた。会の発起人には常連客だった磯村尚徳、三枝成彰、鎌田慧、相田洋氏らが名を連ねた。(10. 2 10Fホール)

■ 人間開発報告書2009

国連開発計画 (UNDP) が毎年とりまとめる報告書が世界同時発表となった。東京では村田俊一UNDP駐日代表が会見し、報告書の概要などを説明した。英語版全文、日本語版概要などが同事務所のサイト (<http://www.undp.or.jp/index.shtml>) で入手できる。(10. 5 大会議室)

■ 日中科学技術交流シンポジウム 特別講演会

国際研修交流協会 (有馬朗人理事長 <http://www.act-for.jp/>) の主催で、中国全人代常務委員会副委員長の路甬祥・中国科学院長と同協会の有馬理事長が講演した。(10. 8 10Fホール)

■ 「アジアに魅せられて」

未来をひらく日本委員会 (尾畑雅美代表 <http://www.nihoniinkai.com/>) で、作家で九州大学アジア総合政策センター教授の高樹のぶ子さんが講演した。(10. 15 宴会場)

■ 株式会社 企業再生支援機構 発足式

不振企業の立て直しを支援する官民出資の株式会社の発足式が行われ、西沢宏繁社長 (元東京都民銀行頭取) が「企業規模、地域を問わず再生する。個別企業の再生だけでなく業界再編も視野に入れ、事業・地域再生のモデル発信を」と抱負を語った。菅直人副総理、亀井静香郵政・金融担当相らもあいさつした。(10. 16 10Fホール)

■ OECD東京政策フォーラム「日本の農政改革」

OECDがまとめた報告書『日本における農政改革の評価』(英文の報告書=<http://www.oecd.org/dataoecd/26/45/42791674.pdf>) をうけて、同東京センター (中谷好江所長) がフォーラムを開催した。報告書では、国際競争力向上のための農政改革のあり方の提言などをまとめている。パリ本部から来日した報告書担当者3氏の解説や意見交換が行われた。(10. 21 宴会場)

■ パネルディスカッション 政治報道を考える

日本新聞協会ほか新聞・通信・放送16社主催の新聞週間「記念の集い」で、「政治報道を考える 歴史的転換期にある政治とどう向き合うか」をテーマに討論が行われた。パネリストは河野洋平・前衆院議長、西崎文子・成蹊大教授、村岡彰敏・読売新聞政治部長、岩田栄一・TBSテレビ政治部長、コーディネーターは星浩・朝日新聞編集委員が務めた。なお、記念の集いは東京のほか大阪、名古屋、福岡でも、地元メディアの主催で行われている。(10. 21 10Fホール)

■ UGSS2009「大競争時代、大学経営力を検証する」

グローバル競争の中での大学経営のあり方についてシンポジウムが開催された。米大学理事会協会のリチャード・レゴン・プレジデントの講演やパネルディスカッションが行われた。(10. 22 10Fホール)

■ メディアの再生はなるか

日本ジャーナリスト懇話会 (竹田純会長) で、河内孝・元毎日新聞常務が講演し、既存メディアの今後、新聞の将来像について報告した。(10. 23 大会議室)

新しいOB会員

こばやし いつき  
▼小林 樹



1968年日本経済新聞入社。日経香港社長、日経事業出版社取締役、テレビ北海道常務取締役、日経ラジオ社長などを経て現在、日経顧問。

新聞、出版、テレビ、ラジオといわゆるマスコミ4媒体を経験しました。いずれも今や経営的に大きな曲がり角。再生の道はどこに。

ながさき かずお  
▼長崎 和夫



1966年毎日新聞入社。政治部長、論説委員長、中部本社代表、東都春陽堂社長、専務取締役などを経て、現在毎日顧問。

「田辺聖子の人生あまから川柳」収録の「新聞を切り抜く男職がなし」をみた友人から「君の作か」といわれ苦笑してしまいました。

よしだ かつじ  
▼吉田 克二



1972年朝日新聞入社。朝日新聞社入社。政治部記者、論説委員、世論調査部長、記事審査委員長、紙面オンブズパーソンなど。

ジャーナリストの気持ちを忘れないよう、クラブの催しに触れて感覚を保ちたいと思っています。

■ 優良放送番組推進会議 記者会見

優良放送番組推進会議の有馬朗人委員長、月尾嘉男事務局長が会見した。同会議は今年4月、テレビ番組の質に関心を持つ企業26社で設立され、アンケート調査による番組評価などを行ってきた。会見では、設立から半年の活動内容や、会員企業が41社に増えたことなどが報告された。(10. 28 大会議室)

■ 「アジアで今何が起きているの〜ICRC局長が語る」

赤十字国際委員会 (ICRC) のアラン・エシュリマン東/東南アジア大洋州事業局長の報告会が行われた。エシュリマン氏は今年1月にフィリピンで起きたICRC職員誘拐事件で、アブ・サヤフとの交渉の陣頭指揮をとった。報道では伝わらない反政府勢力の素顔、彼らとの向き合い方などについて語った。(10. 31 宴会場)

■ 放送人政治懇話会

次のようにゲストを招いた。川内博史・民主党衆院議員 (10. 7)、野田毅・自民党衆院議員 (10. 14)、馬淵澄夫・国土交通副大臣 (10. 21)。

夫婦で1-2フィニッシュ〜ゴルフの会

第93回ゴルフ会は10月30日 (金)、若洲ゴルフリンクスに22人が参加して行われました。

夏日のようなゴルフ日和の大会を制したのは、賛助会員の本部茂会員 (ナショナル・ピーアール) でNET71。夫人のみち子さんはNETトップの62でしたが、初参加のため優勝資格がなく2位に。ご夫婦での入賞となりました。本部会員は「77歳と71歳。夫婦でゴルフを楽しんでいます。今回は同伴者や天候にも恵まれ最高のプレーができました」と。3位は森本英之会員 (朝日OB) のNET75でした。

懇親会では、退任する白木東洋幹事の後任に青木徹郎会員が選任されました。(事務局 小橋敏文)

**バー、レストラン、宴会**

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766



**霜月懐石 12月4日まで**

前菜・鮫肝豆腐琥珀羹ほか、椀・清汁仕立て、造り・鯛す造り、焼き物・朴葉包み焼き、揚げ物・海老真丈蓮根挟み揚げ、酢の物・小柱養老掛け、食事・焼きおにぎり梅茶漬け、甘味・季節の果物(5,250円)

**きりたんぼ鍋 11月24日～12月4日**

毎年好評のきりたんぼ鍋を今年も期間限定でご提供します。1人前2,200円です。必ず事前にご予約ください。(板長 渡邊実)



**カニづくしコース 12月22日まで**

カニの美味しい季節になりました。3種類のカニをお楽しみください。ランチタイムもサービスいたします。MENU ズワイ蟹のカクテル、ワタリ蟹のミネストローネ、トラバ蟹のあぶり焼きリゾット、ゆずシャーベット、パン、コーヒー。(2,980円) (シェフ 黒須修一)

**クラブで忘年会、新年会 11月16日～1月30日**

今年も忘年会、新年会用に手頃なお値段で利用いただけるパーティープランをご用意しました。洋食8品、和食2品で1人3,500円(税込み)です。1,500円(税込み)でフリードリンクにもできます(2時間)。部屋代を含めても1人6,000円程度でお使いいただけます。問い合わせ、お申し込みは電話3503-2724へ。

**創立40周年を記念して「とっておきの話」(六)**

創立40周年記念で作成した「とっておきの話」(六)がお手元に届いていると思います。この5年間にクラブ会報に掲載した「書いた話 書かなかった話」51編と「新春随想」5編を取録したもので、記念パーティーの招待者にもお配りしました。落丁、乱丁などがございましたら事務局へご連絡ください。すぐにお取り替えます。

**<訃報>**

栗田晃穂会員(時事通信OB、85歳)が10月18日に、近浪廣会員(日本コンベンションサービス、76歳)が10月7日に死去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

**<会員の著書>**

写真集 美智子さまのお着物 渡辺みどり会員(共著)

**<寄贈書>**

東京相撲記者倶楽部百周年記念誌  
鶴田卓彦元日本経済新聞会長

**<会員現況>** 法人会員 137社 基本会員 766人 個人会員 1,521人 法人・個人賛助会員 70社 179人 特別賛助会員 79人 名誉・功労会員 9人 計 207社 2,554人

**お断り** 今号は「創立40周年パーティー特集」掲載のため、13日、発送しました。

**クラブの電話 ダイヤルイン**

和食レストラン(9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン(10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	クラブ行事への申し込み
3503-2724	3503-2722
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp

**会報委員会**

委員長=住田良能  
委員=小西美和子 近藤憲明 菅谷 齊 富田 恵  
羽原清雅 枇杷田裕 堀 徹男 村澤繁夫  
八木浩幸

連絡=長谷川和子 本庄五月  
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

**ホールご案内**

コンサートで過ごすクリスマスはいかがですか。会員社のホールで開催されるコンサートなどの情報をご紹介します。

●日経ホール

♪12/23(水・祝) クリスマス・ジャズ・イン  
日本ジャズ協会21のオールスターが奏でるクリスマスジャズコンサートです。(5,000円)

問い合わせ: 03-5281-8074  
<http://www.nikkei-hall.com/>

●サントリーホール

♪12/23(水・祝) クリスマスコンサート2009  
日本を代表するバロックアンサンブル「パッハ・コレギウム・ジャパン」が華やかな響きを奏でる極上のメサイアをお楽しみください。(S席 9,000円ほか)

チケットセンター: 03-3584-9999

●王子ホール

♪12/24(木) クリスマス・スペシャル・コンサート X'maro 2009  
ヴァイオリンの篠崎“まる”史紀が率いる弦楽合奏団「MAROカンパニー」が聴かせるロマンチックな弦楽セレナーデ。(6,000円)

問い合わせ: 03-3567-9990

**YouTubeに「日本記者クラブチャンネル」を開設**



YouTubeチャンネルに日本記者クラブチャンネルを開設しました。今後は原則として、すべての記者会見と講師の了解を得た研究会の模様を掲載していきます。URLは<http://www.youtube.com/user/jnpc#p/u/>です。

クラブのホームページからも開くことができます。

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

**資料室 「会見速記録」: 10月の新規掲載**

- 茂木崇東京工芸大専任講師「ドラスティックに変貌を続ける米国の新聞社の経営戦略(資料)」(10.5)
- 寺島実郎日本総合研究所会長「世界の構造転換と日本の進路を考える」(9.11)
- 岡本行夫外交評論家「『世界に与えるべきは安心感』- 民主党政権の対外関係-」(9.7)
- エドワード・ライス在日米軍司令官「日米同盟は地域全体の安定要因」(7.28)

**今後の行事予定 (11/6現在)**

- 11.19(木) 14:00~15:00 (宴会場)  
アンヘル・グリアOECD事務総長 記者会見
- 11.20(金) 16:00~17:00 (宴会場)  
アントニオ・グテレス 国連難民高等弁務官 記者会見
- 11.25(水) 14:00~15:30 (10階ホール)  
研究会「日米中」③河合正弘 アジア開発銀行特別顧問
- 11.26(木) 10:30~11:30 (宴会場)  
田中伸男IEA事務局長 記者会見
- 11.27(金) 14:00~15:30 (10階ホール)  
研究会「国会改革」 谷福丸 元衆議院事務総長

HP「[会見カレンダー](#)」/行事案内専用電話 (03-3503-3764)  
日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をお知らせしています。

## 写真回廊

撮影 浅原敬一郎 (あさはら・けいいちろう 日本経済新聞社写真部)



KDDI山口衛星通信センター (山口市)

### 夜明けと星と革命と

ブルーブラックのインク瓶をひっくり返したような雲が、中空に切れぎれにかかっている。雲のへりに白く光っているのは明けの明星か。夜空はいま、紫から徐々にあかね色に変わるうとしている。

KDDI山口衛星通信センターの夜明け。18基の大型パラボラアンテナが思い思いの方向を向いて展開している。インド洋上と太平洋上の静止衛星に向けたパラボラは仰角を下げ、右端の電波望遠鏡はパラボラを上に向けて、昂然と天をにらんでいる。人さまざま、パラボラの向きもとどりどりが、相手は通信衛星か天体。星の動きを凝視していることには変わりはない。

星の動きで思い出した。フランス大革命が始まったとき、革命という概念も言葉も存在しなかった。そこで「星がその出発点に戻ることに、星の公転」という意味の「レポリューション」を借用して未曾有の事態を表すことにした。金星も目を回すような天文学的動乱だね、と当時の人々の興奮した声が聞こえるようだ。

民主党が夜明けを迎えた。「政治主導・国民主導の新しい政治へと180度転換させようとしています」と鳩山首相が所信表明演説で強調した。180度? つまり1回転の半分。半革命かな。(諏訪 正人)